

はしがき

「自分なり」ということにこだわる人がいる。

「これが自分のやり方だ」と言い張る。

「これは自分のポリシーだから曲げることはできない」と頑固になる。

自分が間違っているとしてもその間違いを認めない。「あなたは間違っている」と何度言っても人の言うことに耳を貸さない。

この本ではそうした大人になれない大人たちを取り扱う。

よく「彼の態度は自信のなさの裏返しだよ」というようなことを言うことがある。

たとえば「オレは絶対の自信があるから、そんなことなんでもないよ」というような人がある。そのような自信を誇示するような発言を聞いて、人々は陰で「あいつが、ああ言うのは自信のなさの裏返しだよ」と言う。

あまりにもオーバーに悲しそうに泣く人を見て人々は「悲しくないことを隠しているの

よ、あの人の心の冷たさの裏返しよ」と言う。

やたらに強さを誇示したり、愛情を誇示したり、悲しみの感情を誇示したり、人はさまざまなものを誇示する。

フロイトの説明を待つまでもなく誇示されたものは欠如を表す。

つまり誇示された強さは弱さの裏返しである。誇示された愛情は冷たさの裏返しである。「自分なり」にこだわって周囲の言うことに耳を貸さない人は実は自分がない。

世の中には、そうした裏返しにされたものだけを表現しながら生きている人がいる。

セーターを裏返しに着ていたら人にはどう映るか。人にはその人がセーターを裏返しに着ているということがわかる。着ている本人にはわからなくても、それを見ている人は変な人だなと思う。

それと同じで、裏返ししの感情を表現しながら生きている人を見て、私たちは何となく違和感を覚える。その人とは何を言っても通じ合わないような気持ちになる。その人とのあいだに壁を感じる。

そういう人たちに「あなたは間違っている」と説得するのは困難である。そのような人はいったん自分に都合のいい思い込みをすると、それを訂正するのは極めて困難である。

それは、その人に自分がないからである。その人にあるのは劣等感だけである。その人が劣等感に支配されているからである。

誰にでも劣等感はある。

話し合いができる人は、その人自身が劣等感をコントロールしている。

しかし自我が劣等感にコントロールされている人は、友人であれ、親であれ、先輩であれ、とにかく他人の言うことに耳を貸さなくなっている。難しく言えば、自我が劣等感に同一化している。その人イコール劣等感なのである。

彼らは人の言うことに耳を貸すのが恐いのである。それは自分が間違っていると心の奥底のそのまた底で知っているからである。

耳を貸したら現実と直面しなければならぬ。現実には立ち向かわなければならぬ。自分は敗北者だと認めて、人生を改めて出発し直さなければならぬ。

自分の非を認めない人々は、その恐怖に怯えている。

この本では、アメリカで起きた三九人の集団自殺を考えながら、人間の現実否認の恐ろしさを書いてみた。

集団自殺をした三九人は最後まで自分の非を認めなかった。カラスは白いと言い張って

死んでいった。

自分の非を認めることができないのは、愛情を求めているからである。

自分の非を認めない人は、同じように自分の非を認めない人と一緒にいると心地よい。

「世の中間違っている」と一緒に言ってくれる人といると心地よい。

一緒にいて心地いい人というのは、喉が渴いたときの塩水のようなものである。会っていれば会っているほど、生きるのが辛くなる。自分にとって心地いい人とは自分を地獄に連れていく人である。

しかしそのときそのときは、一緒にいることが最も楽なのである。

集団自殺などというと、自分とは関係ないと思う人がほとんどだろう。

しかしそうではない。彼らと同じように、独りよがりな行動をしている集団は今の日本にあふれている。

それは潰れていく会社の主流の派閥であり、暴走族であり、偏向した思想の政党である。あるいは憎しみの新興宗教の集団である。政治的過激集団である。

会社でも、学校でも、政治の世界でも、孤立した人々の集団はたいてい独りよがりな集団である。集団のメンバーは皆自分がない。

もし今、生きるのが辛いなら、あなたの仲間はこの三九人の集団自殺の仲間と同じかもしれない。

本当の仲間なら生きることを考える。自己の確立を考える。

集団自殺した三九人は集団の中で自己を確立するということを考えなかった。集団に寄りかかって生きていた。

もしあなたが今、属している集団に寄りかかって生きているならば、その集団の仲間もあり方を十分に調べてみる必要がある。彼らと同じように不幸にならないために調べてみる必要がある。

つまり彼らのように不幸になることを避けるにはどうしたらよいかと言えば、答えは簡単である。仲間を調べることである。友達を調べることである。あなたの今の人間関係を調べることである。

そこでこの本では繰り返し返しこういう友達には注意しなければならぬと書いた。あなたを地獄に連れていく人はこうした人だと解説した。

○集団自殺した彼らは真面目であった。努力もした。盗みなどの犯罪を犯さなかった。二歳前から酒など飲む少年ではなかった。真面目な大人であった。

でも生きていけなかった。

ちよっと現実を認めればもっと楽に生きていけたのである。ちよっと仲間を変えればもっと楽に生きていけたのである。

何だか生きるのが辛いと感じたときには、どこかこれまでの生き方が間違っているのである。その今までの自分の生き方の間違いを直さないで、辛さの原因を自分の外に求めてしまうと、いよいよ生きるのが辛くなる。今の生き辛さは今までの生き方がつくってきたものである。

何とも気が晴れないで、重苦しかったり、原因もないのにイライラしたり、すぐに不愉快になったり、いったん憂鬱になるとなかなかその憂鬱な気分から抜け出せなかったり、何をするのも億劫だったり、体がいつも何となく不調だったり、いろいろのことがあったときに、人にあたるだけで時を過ごしてはならない。

自分の矛盾した気持ちや会社の上司とか、親とか、学校とか、社会とか、時の政権とか、ぶつけやすい相手にもぶつけても、心理的に楽にはならない。

生き辛さの原因をそこに求めていると、いつになっても生きるのは楽にならない。最悪な場合には自殺とか殺人のような結果に終わることさえある。

この本はそうした「大人になれない大人」が自分で生きられるようになるための本である。自分のどこに問題があるのか、自分は何に気がついていなかったのか。この本は大人になれない大人が自分を理解するための本である。

自分がわかれば自然と自分のすることが見えてくる。

この本は心理的に大人になれない大人の心理を解説することに焦点をあわせると同時に、心理的に大人になれない大人がどのようにこの苦しい人生を乗り越えていったらよいのかに焦点をあわせた本である。

どう自分を考えたらよいのか、どう周囲の人を考えたらよいのか、そしてもし幸せになりたいなら、自分をどう考え、どう行動し、何を耐えたらよいのかを考えた。